

和漢

朗詠國字抄

七八





和漢朗詠集抄卷之七

雜

閑居

閑居 閑居

不獨記東都履道里有閑居泰適之  
叟亦令知皇唐太和歲有理世安樂  
之音

雜  
閑居  
獨東都履道  
里閑居泰適  
之叟有詩記  
不  
亦皇唐太和  
歲理世安樂  
之音  
有詩記

洛中詩序東都洛陽城履道里白居易詩序  
文宗之世號理世意安樂音あると毛詩の序  
治世之音安以樂其政和也我身かくあるなりわの治  
世の安樂哉人か  
まの世と云意







都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲

跡未拋苔徑月避喧猶卧竹窓風

陶門跡絶ぬ春朝雨燕寢色衰秋夜の霜

眺望 風白浪花千片雁青天

切曹と云司のせんといふ時強で司のせんといふ北山の北邊  
 と云故事建康府上元縣に北山あり今て小の山あり上  
 の閑處に心ぞ隱逸の句也蘭の檣柱の截と花やるる  
 心にわづらひある樹香ある草を出せしつゝて年いなる  
 此の世推一葉の舟の具と云るまで楚辭に桂の權蘭の  
 漿魚又が舷を鼓てうひとあるはと云る呂連公東海の  
 東に世捨捨れ故事と云る海のよと云心解へり  
 其後東坡が赤壁の賦に此句のそふ相公の名譽を  
 都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲  
 門は出ずす筆居る題へ都府都督府と太宰府と云一首は相  
 管のたしる配所より府の樓の棟をり縁かきりるは此觀  
 音寺天智天皇の御祈願して滿誓沙弥別當なり其寺の鐘  
 の聲の聞ゆるといふて家に出る心あつたと感哀深  
 跡未拋苔徑月避喧猶卧竹窓風  
 白樂天が香山の雪の詩意に同す世は遁と平伏幹  
 山林に跡は晦せとも苔の徑に月の明かる抛るは世上の喧

竹の葉に風のそよ音はまことと  
 と晦に明かるはさすも静なるに動はるる意あり  
 陶門跡絶春朝雨燕寢色衰秋夜の霜  
 閑居に日かぎり夜も明あめ心は懸る陶淵明が  
 門に人跡絶春雨の比日けしめ燕寢美人の閑處  
 と云て年老色衰て秋の夜長に  
 霜と云く明あめと云  
 我どなるもかほまどわささつとまらぬ人けまつとまらぬ  
 戀の歌に月日のうつると人まら閑はむはに人も  
 つるに問來す草むひまげりあまらるといふとら  
 眺望 眺もち望る  
 風翻白浪花千片雁點青天字一行  
 風の吹く樓より晩の景眺眺る詩海の面は  
 風に翻る浪は千片の花が散るふあつ空飛雁青天紙一行の



紫闥出而東望山岳半挿雲根之暗に挿り翠嶺踏而西顧家郷の来心煙樹之深に没す

天台山之高巖四十五尺浪白長安城之遠樹望百千萬莖の薺青

紫闥出而東望山岳半挿雲根之暗に挿り翠嶺踏而西顧家郷の来心煙樹之深に没す

出紫闥而東望山岳半挿雲根之暗踏翠嶺而西顧家郷悉没煙樹之深

見天台山之高巖四十五尺浪白長安城之遠樹望百千萬莖薺青

長安城之遠樹百千萬莖薺青

唐の天台山、洛陽西京、風朔南京、江陵、北京、太原、中京、長安、日本、東国、異邦の石、都洛陽、又中京の意、以て長安城とも云、顔氏家訓に遠く樹望、百千萬の莖、薺の青、

都の樹々、遠くより千萬の薺の青、と作す

江霞隔浦人煙遠湖水連天雁點遙

一行斜雁雲端滅二月餘花野外飛

老眼迷易殘雨裏春情難繫夕陽前

江霞隔浦人煙遠湖水連天雁點遙

一行斜雁雲端滅二月餘花野外飛

老眼迷易殘雨裏春情難繫夕陽前

上の同じの題、雨の石、殘の空、春情、老眼、夕陽、春情、難繫、夕陽、前、素性







揚岐路滑。我之送入。多年。李門波高。人之送我。何日。何の目ぞ。

萬里東に來何の。再日。一生西望。是長襟。

九枝燈盡唯曉。一葉舟飛不待秋。

浮世以後會。還石火の風に向。敲て鼓悲。

揚岐路滑。我之送入。多年。李門波高。

人之送我何日。

江以言

別路に花飛白と云詩の序此句は作都學者が登庸の  
連懷がうとて揚岐路と李門波高と云ふ事なり  
花は云り揚岐路と云人岐路は南行北行の道の  
古きとて位は南子の出入の南北別行岐路と云  
踏滑今は我幾人か狂國の饑や我又人か食  
せん何日かわんと云心後漢書に李膺字元禮學問名  
高其狀の士此人は橋らるるものあり登龍門と名づくあり  
魚が龍門の滝を登るにあり故事にて用らるる事なり李門波高と  
萬里東に來何の再日一生西望是長襟  
蘆隱岐國の酒所歸洛の時唐人の飯國もに遇て野相公  
作ると云今萬里東歸又東方來んと何の日ぞこのこと  
一生西の方望んと長襟はてあり  
或人いふ此句は詩の本跡と

九枝燈盡唯曉。一葉舟飛不待秋。

渤海國の使を送る時の作夜源燈尺の燈はもちて  
玄んとする一葉ハ秋待て散の客の一艘の舟はさやふ別と  
行と開元遺事に韓夫人五枝燈樹置とあり  
と枝九ツある燈臺へ○下の句成て上の句は得る朝綱卿の云  
九枝燈盡以て作と云く九枝燈の句は  
案し得る舟と舟一葉とら下前巻に出たり

欲以浮世期後會。還悲石火向風敲。

浮世の使斐氏の饑りあり定むるは浮世の在て再會んは借  
期と石火の消やむるは風に向て敲と云ふは命なり  
て逢ふと云やえりくは悲なり  
管家文草に還の字先とあり  
後撰  
ちとひやるくたぐりさきじは河原をらん  
身こそへぞ居とも我志ふ心雲かたささてら思ひや  
峯のまろ雲は何もつらんと山遠くと雲行客の跡埋す心







定て出波頭の満  
處ハ日晴て春

洲蘆の夜の雨他  
郷の涙岸柳の秋  
の風遠塞の情

蒼波道遠して  
雲千里白霧山  
深くと鳥一聲

篁簾國(流)時之作渡の口の郵船(風)の定(流)野相公  
まで漕出の郵(馬)の諸(流)國(謫)せむと詔(す)吾行  
へ(郵)竹(思)あ(波)頭(日)晴(春)  
春(心)あ(春)

洲蘆夜雨他郷涙岸柳秋風遠塞情

旅の泊の意(作)爾雅(水)中の居(洲)と(海)の直(幹)  
砂水のゆり(陸)と(洲)先に生(芦)の葉(夜)雨の  
音(哀)る(寝)の袖(他)郷(自)國(城)を(來)て(岸)  
郷(岸)の柳(秋)風(吹)て(遠)胡(國)の地(柳)多(一)と(城)  
旅(邊)塞(人)の情(又)さ(あ)る(ん)と

蒼波路遠雲千里白霧山深鳥一聲

紅(石)山(寺)小(湖)眺(望)蒼(波)路(遠)千(里)の直(幹)  
雲(下)の句(城)案(煩)陸(奥)下(足)柄(山)を(考)至(至)  
具(女)道(遠)雲(井)を(深)山(路)に(聞)ぬ(鳥)の  
聲(れ)と(口)号(る)か(ぞ)や(下)の句(城)霧(深)山(路)に(鳥)の(聲)を(至)

作とぞ

のぐと明る浦の帆書に流るるも

天明(夜)の明(行)空(の)お(わ)り(か)て(さ)る(ぬ)か(の)と(明)る(浦)  
石(の)浦(朝)霧(漕)出(る)舟(の)嶋(ま)を(行)ぐ(今)い(づ)れ(行)  
ら(ん)と(か)が(夜)や(り)夜(に)思(ふ)と(此)哥(人)丸(第)一(の)詠(を)諸(説)  
區(を)り(公)任(卿)を(九)品(城)を(も)か(上)品(上)と(鳴)と(冬)  
双(子)嶋(鞍)掛(嶋)

かどわさ

古今

隱(岐)國(流)さ(ま)り(時)船(に)乗(出)立(て)京(る)人(の)あ(れ)い(し)  
る(和)田(の)原(海)の惣(名)八(十)嶋(の)多(の)嶋(人)を(告)京(る)  
人(の)あ(れ)い(し)釣(舟)の(言)は(あ)つ(と)と(非)の(仁)明(帝)の(御)時  
承(和)五(年)遣(唐)使(の)命(を)時(正)使(第)一(の)船(風)波(の)損(ド)  
第(二)の(望)の(舟)と(ん)と(堅)く(争)て(肯)ぜ(ば)勅(詔)を(む)く



其後勅免ありたり

たよりあはれをむつげやらんるの美によさぬと

昔に聞のそとるに思ひ一白河の關はるそと敵一と都告

はるそと使わはるそとたのほいとそと心か意はめざし句

庚申

此夜癸卯三月九日癸亥夜なりと古書に

命兒子常遊子命兒子と唱はる其思難

福はわらふそとる為意の口もそとる

年長毎勞推甲子夜寒初共守庚申

三體詩か出絳縣の老人年長朝也甲子夜以答るると許

庚申

年長毎勞推甲子夜寒初共守庚申

子夜推に勞す

夜寒初共守庚申

己酉年終冬日少庚申夜半曙光暹

仁和二年菅公護岐守任國にて寛平元己酉年の御作之其

也バ猶長くて明くぬるといふ當意なり

らるるれんるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

のえんるるれんるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

いぞるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

のえんるるれんるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

帝王付法皇

徳天地に配して八位に私せざる帝王と云讓位の後佛門に入るは白皇と云

己酉年終冬日少庚申夜半曙光暹

帝王

付法皇



漢高三尺之劍

坐制諸侯

張良一卷之書

登師傳

漢高三尺之劍。坐制諸侯。張良一卷之書。

立登師傳。

漢の高祖蕭何は、我布衣より起して手に三尺の劍提く高く上り天下を取ると、碓蕩山の白蛇が斬り劍を更記

した。諸侯は諸国の侯、日本から風の詩雲の詩の秘見、今之張良字子房若かりし時、下邳と云れ圯橋の石よりして老翁

履をちと取り得た。よと云、此年の高祖が敬ひ跪て翁足にうけて行過り、張良あやまるとして従ひ行をどし、翁生口

て孺子ぢやと云ふと、其後つゝ卷を授けり、大に公望の兵書。張良後に劉季に從く、此書を以て軍の事、成

劉氏の天下を定む。高祖の謀は帷幄の中、勝と成千里の外に決する、良が功くと良後に丞相と成

り師傳といふ。帝王の師臣、太師太保我が国の三公、かあつと大政大臣、尤右大臣、今七書の三書、彼翁漢の旨

項莊之會鴻門。寄情於一座之客。漢

祖之歸沛郡。傷思於四方之風。同前

一説に藤の雅、後漢書に書る文、項莊は項羽の季父一座の客、漢の高祖、鴻門の會に劍を抜て舞、高祖は

討ん情、事成、高祖、古沛郡に歸り、酒を置て、邑の父老を招て、宴會せり。此上、賢士を得て、四方を平

小治く、思、傷、楚の項羽、沛公、高祖、鴻門に招て、酒

を飲せしむ。時、項羽、劍を拔て、舞、張良、伯、舞て、沛公、隔

張良門外に出、樊噲、呼、喚、入、門、堅、入、す、を

軍門を、倒、入、て、幕、排、立、髮、逆、眼、怒、死、死

を、恐、斗、酒、辞、ん、や、三、斗、飲、肴、の、境、の、有、成

劍を拔て、切、食、此、内、沛公、座、立、て、交、服、之、ひ、そ、う、道、之、其、後、楚、王、項、羽、亡、天、下、旋、む、下、の、尚、漢、祖

と云ふ。高祖、默、布、討、て、故、郷、沛、歸、歌、て、大、風、起、雲、飛、揚、威、加、海、内、兮、歸、故、郷、安、得、猛、士、兮、守、四、方、風、を、自、ら、ら、ぬ、と、雲、成、乱、に、と、四、方、之、風、と、作、る、文、々、に、本、り

之の客に於奇漢  
祖之沛郡に歸  
思成四方之風  
に於傷し

項莊之鴻門  
會一情於座







梁元の昔の遊春王之月漸落周

梁元昔遊春王之月漸落周穆新會

穆の新會西母之雲歸と欲

西母之雲欲歸

菅三高

政成布之庭の風流未必歎於崑閬兼之也文好之世ハ德化未必於光也

布政之庭風流未必歎於崑閬兼之者此地也好文之世德化未必於光于黃たる兼之者我君也

大炊御子の南堀河の西に冷泉院と云御所あり村に帝の御と云にの宴會の序なり上の句の有る美は下下の句ハ君の徳成りて政成布之天下治る事也我君の徳成りて政成布之天下治る事也我君の徳成りて政成布之天下治る事也







應神天皇第四の皇子大鷲鷯の御門仁德帝と申其御房に住るふ菟菟道稚郎子と稱す御父の愛子也崩御の時御位はあづきもふに仁德難波津の宮に居るふ菟も御兄と申すとある仁德御父の命ごとくふひに譲りて三とせに成らるわいふ宇治の宮亮のひらり此時王二二今ハ御位つがやめと歌にまき難波津の文とりのせこの花も咲く色バト仁德の難波の宮に居るふ菟も菟菟今春去て春の主とる理とさやこの花とハ世保ら波風成はち民の愁成萌出る春小色ぢり

應神十六年二月朔日に百濟の王の子王仁來朝すわり難波の宮の師とありて仕とまうらるちりぬまふる春ハさびぬちとせの後ハ君成のまん五木の花ハちとどる又來る春のこのとあるとのさねど千とせ乃松千代の椿とど限らぬわい君代ハ限あるさうもまこの花のちハ君成のまんと此御歌ハ天皇の親王ふてち時かどさもせらん寄花祝の心とぞ

親王

親王

庫車軟輦貴公主香衫細馬の豪家郎

庫車軟輦貴公主香衫細馬豪家郎

東平蒼之雅量寧漢皇褒貴無雙  
非哉桂陽鏢之文辭亦  
是齊帝寵愛第

東平蒼之雅量寧非漢皇褒貴無雙  
 之身哉桂陽鏢之文辭亦是齊帝寵  
 愛第八之子也

冷泉院の親王をためて孝経讀み詩序の詩に文章にを稱美奉ると昔の親王成りて今に東平の

菅三品



江都之勁捷也。七尺の屏風其徒高淮南之求神仙也。一旦雲に乗而何の益あるん

卷之開て己に知子爲の道秋の風に悵望す鼎湖の雲

江都之好勁捷也。七尺屏風其徒高。淮南之求神仙也。一旦乘雲而何益。

開卷己知爲子道。秋風悵望鼎湖雲。

親王入學の詩序へ王は昔の王は此の句に此の順句は王は不めてあまも譏る句の集ふ入るる古の江都王は勁身捷七尺の屏風を飛超人の及ぬと強ちて了が勁控をハ爲すもをむとるも徒に高しと云淮南王劉安仙術得

我王の孝行先何到梧岫の秋の風一片の煙

此花非是人間種瓊樹枝頭

我王孝行先何到梧岫秋風一片煙。此花非是人間種瓊樹枝頭第一花。

子とて親に奉むる道は知れぬ鼎湖の御墓ある處にて秋風吹くものも悵望と云て先帝は之を悲しむて云黄帝首陽山の銅鑪麓かて鼎湖鑄の白龍降るよに住帝は一員て天に昇る臣か解龍の足尾に取れて七十餘人天上す龍の鬚に取

此花非是人間種瓊樹枝頭







百里奚食と道  
路に於て擄公  
之に委に政を以す  
寧戚子牛と車下  
に於て桓公之  
亦任すふ國を以  
す

玉よりし文子ハ謚トハ右傳史記に出魯國の人傳美談とす  
左氏ハ季文子と譏てあまとも章と断て義と取らるるハ  
言と以て意と害ハ後漢の丞相公孫弘ハ孝武帝の大臣とて  
富貴の人るまとも也故對と惜み貧て外ハ賢人のさぬ布  
の被と服と漢書小出汲黯字ハ長孺淮陽の人之直實  
ある人也汲直と云之此人公孫弘と實の賢人ありんた  
人目と云りて偽多く實  
少と議らるるなり

百里奚乞食於道路。擄公委之以政。

寧戚子飼牛於車下。桓公任之以國。

百里奚ハ周の時虞の國の太夫より君と諫て用ハ漢書文  
らも亦退き後貧よりらん道のほりに食とを乞ふを秦  
の擄公其賢と聞て迎へ國の政と委たりんた大に國を強  
し列國は威とふらハ虞の君ハ其諫と用す晋よりせんり  
史記に出寧戚齊の桓公の賢かと知て仕んと思ふも使と得  
ず商人とる車と負て桓公の門よりらんらに公客と迎へ

孫弘問閑  
閑客無傳説  
舟忙して人に借  
不

とて門外に舟が車はしハのけり其時牛の角は  
歌ていこ南山燦々白石爛々中有鯉魚生不遭堯與  
舜禪短布單衣終至脛長夜湯々何時旦微牛苦々  
何時駕矣桓公此歌ハ凡人にわげと召て後車にのせ  
大臣にハ一國の事任せしる果して賢者なり事は  
三齊畧記其他諸書に出寧戚子かどの子ハ男とをす

孫弘問閑無閑客傳説舟忙不借人

裴氏 司空 興化と云此の也此の亭に宿り靜閑ハ山水白  
弄ひくと成作漢の丞相公孫弘東閣成むと賢人ハ招り  
り後平津侯に封せらむ此故事成いえり閑ハ門之傳説  
ト草の詩に出殷の武丁相として巨川成渡らば汝成舟楫と爲  
とし此故事小舟作と孫弘傳説なる丞相小舟忙り  
らハ今裴司空のどく舟借て客成遊しむふ以てと美

西京席門。乃是陳丞相之舊宅。南山

芝澗。寧非袁司徒之幽栖。

西京の席門は  
乃是陳丞相之  
舊宅なり。南山  
の芝澗。寧非袁  
司徒

後江相公







春去夏闌て衰  
司徒之家の雪ハ  
路達應旦ハ南  
暮北鄭太尉  
之溪の風ハ人知  
被

帝も嚴子陵さんとしつまで聘使あせども辞しつる帝其  
處に往てん多し子陵高く卧て起ば床のわらわらぬて腹成ぞ  
多し陵さんぞ恨る朕も忘すとのゑひ同車して飯り是より  
陵もるに卧多しうり陵足成りつて帝の御腹の上にかさるる  
太史奏して客星御座成りつと帝のさへく故人子陵  
苦くばとあり後漢書に之あり其釣成垂し知成嚴陵  
と号しうり涇水ハ清渭水ハ濁より三つ勅成りし又同車  
ありハ背成りありハさるるひらりせし成すもさるるにたり

春去夏闌。袁司徒之家。雪應路達。旦  
南暮北。鄭太尉之溪。風被人知。 同上

上と下と文之春も過夏も闌も今ハ袁司徒が門の雪消  
て通るるもバ彼成尋出もとと袁安ごとハ三章前小初  
且ハ南風吹暮ハ北より吹鄭太尉が溪の風世にかさるる  
人をも知ば早く彼二人の賢者成尋多し愚身ハいと賜  
よと云意ハ漢の時大雪一丈餘積る洛陽の令奉行  
見行るる人家家も雪成拂ふに袁安が宿路もとと

ささすぞに死せりと思て雪成拂ひハ成開袁安倒卧て起す  
いぞかありあざと問ハ大に雪ありて人皆飢なり我も然  
録異傳に出る鄭弘字ハ巨君會稽山陰の人其家溪の南  
にあり其北にあり白鶴山の薪成樵り其谷成若耶溪といハ  
船成此溪川成りるに風波あり漕るるも限ハ或時山  
かて矢成拾ハ暫ありて異人來て求る出てちりるハ汝思ハ  
トあり我叶んと云りる我薪を採んと此成涉るに風の  
定らざる成り異人かしく我此山の神ハ朝ハ南風吹送  
暮ハ北風吹送りせんとも去り其後朝ハ南風吹北より  
吹風定り毎ハ今も成然と云帝聞て官成太尉ハ  
多し日本の大政大臣ハむと云之事ハ後漢書傳に出  
山標あくまご成りるるれをちるるも風吹ぬを

清慎公國伯家類ハ月輪寺の花見の時の歌ハ公の政事ハ成  
あやうるるもて丞相の部ハ技成りるりどの風吹ぬを  
山さる成りあくまご成りるる悦ぶ  
又一条禪閣ハ清慎公の歌と云



將軍

三尺の劔の光は  
氷手に在一張の  
弓の勢八月心に  
當り

雪中に馬放  
朝に跡尋雲  
外に鴻雁聞て夜  
聲射

將軍

三尺劔光氷在手  
一張弓勢月當心

武士の形勢成平く三尺の劔、漢の高祖の故事前、陸將軍  
紀す又吳の季札の劔雪霜の下く氷のどくとわり、劔のさへる  
氷もよふ張る弓半月ふ似る胸の前に横へるも  
月心り當ると作り李都使に贈る詩なり

雪中放馬朝尋跡  
雲外聞鴻雁夜射聲

武士のて成作り周の時齊の桓公北の方孤作とて成征、白  
るに大雪ゆり道成失ひ多く從兵道成ちる歸ると成得  
上卿に管夷吾仲頼水の人の女發の臣小て老る馬成放され  
ぐるに其言に從く古郷の道成得る韓非子に出魏王の  
臣更贏と云い虚發とて虚空に矢成發て鳥成とるの妙技  
あり王の前小て丁の東より西へ過る聲成聞やと射落せり  
とるに將軍の才と藝と成作り鴻雁の  
大なるもの一本は鴻雁雁小作り

千里往來征馬疲  
十年離別故人稀

師勅の虞氏の將軍遠に國に下り唐小贈る詩なり  
遠に道成往來乘征馬疲る他國に年成経て知人稀なる

隴山雲暗李將軍  
之家在穎水浪閑

蔡征虜之未仕

靜歎公前委尤大將成辞せ表之漢書に武帝の時李廣武  
師將軍とあり大宛成平げ隴西に辺土成守居たりとあり  
隴山其處の山小て雲深成心成云十洲記小夏禹王のとき  
荊洲に蔡辛と云とのあり賢小して學成好相の官成ある

と在成辞して云堯舜の世に四言せ成て民とのなり人  
盜成べしと食小乏るべかの二帝に心大なると虚成王のとき  
徳天地と等君に御心成く大事成忘るるの罰成せしむる  
罪人成とせりる世に封成食成んと我成心成あはと深山に入り禹王

耻成七日食成此人頼水にかくも月成浪閑と云成蔡征  
虜是成一説に文選五臣註に太子蔡成輕將軍とて大將軍に

千里往來征馬疲  
十年離別故人稀  
隴山雲暗李將軍  
之家在穎水浪閑  
蔡征虜之未仕



職虎牙に列して。武勇は漢の四七の將に於て拉と雖學麟角は抽で遂に文章は魯の二十篇に於て味

從ひ左賢王の塞は撃つ是征虜の義とぞ征はうつ虜を  
むすぞ表の意は尤大將は武官也世にける武士もあまは彼は  
つひも我は辞をさす  
との義をかり

職列虎牙。雖拉武勇於漢四七將學

抽麟角。遂味文章於魯二十篇

右親衛藤原亞將論語讀の序に虎牙は近衛府より  
大將君の尤右に侍は虎に牙あるをたぬるを後漢の光武  
帝二十八人の將軍あつて王莽は七つ其四七二十八  
人の將をもとのつすとせざる意は拉と云聖人の世に出  
麒麟は額にツの角あり仁獸とて常に出ざるを希るもの  
は其角にると麟角とつり學ぶものハ牛毛よりまげり得  
るハ麟角より少くと云本文九經畧に云ふ此ハ藤原將  
軍の文章は麟角にると抽と云魯の二十篇ハ論語なり  
武官に在て文道は  
嗜は美もるなり

雄劍腰に在拔  
見秋の霜三尺雌  
黃口自吟すれ  
を亦寒王一聲

雄劍在腰拔則秋霜三尺雌黃自口

吟亦寒王一聲

天曆の御時後撰集撰るべき義あり能宣元輔望城時文  
源の順等五人梨壺にらんと謙徳公伊丹藏人少將  
を和哥所の別當とすやひらるに震筆の宣旨の奉行  
の文は順書らんと干將莫耶雌雄の劍の古事にてこれ  
劍と云ふに雄の字は用あり吳王莫耶は劍を造り  
んと鉄はるの二枚は作一枚は献上一枚は私す王の劍  
鳴あやんとは故は問或臣いさく是雌劍は必ず雄劍あは  
王莫耶を誅す又云吳の季札が劍霜雪のじとあは  
漢高三尺の劍と云ふ武官太刀は帯るは云句は雌黃  
ハ王の名に王は訓雌黃のじと云り口はあることなり  
心ハ和哥文章は口より王は吐くこと寒王一聲はさる  
聲あると云孫興天台山の賦は友に示す時こそ地は  
扱は金玉の聲ある







土は是酔郷る  
不此一兩句重  
て詠可北陸豈  
亦詩の國々んや

史を詠す  
燈暗しと數行

虞氏が涙夜深四面楚歌の聲

一兩句可重詠北陸豈亦詩國保胤

源の順能登守て下る時餞の序二百五の紅し饒別詩  
小出辺土に酔郷るしと酒に友あひ興成催してことあり  
足下の人行くと能登北陸道るまじも詩の境小あり  
此吟てとていくびも重くに

仁徳天皇四年二月櫛より四方に民疲朝夕の煙をた  
くふまらふぞ三年民休め官殿破るもども修理成る先  
七年の四月又樓閣に登り御覽まうますの百女の栖小た  
つる成悦びの詠あか電唯人家のしと田里誠守人民の愁  
若城止め天子し治成るのれを  
東史の勤也此部か入

詠史  
史はかき史書のこと事  
題と賦とるん

燈暗數行虞白涙夜深四面楚歌聲

史の項羽本紀は題として詠せり楚の項羽は天下双橋相公  
るに剛勇の將して身の長八尺力鼎成わぐ漢の高祖や  
天下は手と九年七十余度の戦に項羽皆勝るもども張良  
が謀韓信彭越などの智して項羽は垓下とま數万騎か  
用たり夜深て漢の陣に楚の歌うる声しとて項羽は  
る楚をて漢に降漢の方に楚の兵多しと思ひ力成失ひ  
り項羽電變の美人虞氏と几帳の内に夜酒を天を  
悲るる詩を作ていさか拔山兮氣蓋世時不利兮  
驍不逝驍不逝兮可奈何虞兮虞兮奈若何と數  
返らるる色は虞氏とて和して漢兵已界地四方  
楚歌聲大王意氣尽賤妾何聊生とらうとひらるる  
項羽とてのれ落涙數行やと秘藏の岩馬鳥驢か打乘  
東城に落め漢の將呂馬童王殺かとそものれ詩に  
むり是は題とて燈の下に虞氏が別れかとも數行の  
楚流一夜ふまて四方の圍漢兵の中に  
楚歌の聲をくくはるる







和漢朗詠集抄卷之八

雜

王昭君

漢の元帝の宮女王昭君漢の文帝の諱を避て昭君と云王氏の女後宮三千の中第一の美色なり匈奴の王單于漢と和睦を賜り帝の婚するを三千の美人の中形を醜

雜

王昭君

愁苦辛勤して 顛頼盡如今 却畫圖の中に 似る

愁苦辛勤顛頼盡如今却似畫圖中

王昭君都を去て遙々匈奴嫁し愁苦之のび辛勤て 顛頼もともく盡くもバ如今却て醜く画かる畫圖に似る

身ハ化して早胡の

明詠圖抄

雜



朽骨と為家ハ  
雷て空漢の荒  
門と作

翠黛紅顏錦  
繡の粧泣沙塞  
出 尋て家郷を

邊風吹斷秋の  
心緒隴水流添  
夜の淚行

胡角一聲霜後  
の夢漢宮萬里

月前の腸

昭君若黃金の  
賂を贈定是  
終身帝王小奉  
せん

身埋胡塞千  
重の雪眼盡巴  
山一點の雲

數行の暗床ハ  
孤雲の外一點  
の愁眉ハ落月  
の邊

身化早為胡朽骨家雷空作漢荒門

翠黛紅顏錦繡粧泣尋沙塞出家郷

邊風吹斷秋心緒隴水流添夜淚行

胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸

昭君若贈黃金賂定是終身奉帝王

身埋胡塞千重雪眼盡巴山一點雲

數行暗淚孤雲外一點愁眉落月邊

美人の眉片月小似と云夏の心を昭君の顔ハ都の方に  
一孤の雲をかめ戀しと數行の淚ハ眼も暗入との月ハ古郷の  
曉も山のもの入るる月をとり

わづらひのうらみなる時をいへりてはねのこころの  
足車ハ山といへん枕言葉足成つ澄意ハ聞人もね音床啼ハ  
郭公云て胡地ハ昭君唯一人數行の淚ハ孤雲の外にあらぬを

妓女 酒宴の興に弄くものなり



妓女

容貞似舅潘安仁之外  
姪氣調如兄  
崔季珪之小妹

外人ハ識不恩  
唯羅衣  
御香を染有

容貞似舅潘安仁之外姪氣調如兄  
崔季珪之小妹

張文成云唐人唐の皇女に奉りて後を思ふ心多し思ふも思ふも  
色も出さぬ心一ツに歎き過せりがかり思ふも思ふも奉らんめ  
遊仙窟の文作世に引る世人の唯作文と思ひけり皇女の我と  
と思ひけるも此句ハ其文の流るる所の流るる深山入思ひ  
がけぬ仙宮に至る女に案内問ふも彼女その所の仙女十婦  
と云人のありさぬを賛て詠詞十婦が容貞ハ晋の潘安仁の  
美人に似たりと云んて詠詞詠詞安仁ハ外の姪なるも  
出此人市を過るに色ある女子あはれ珍果投車投入  
崔季珪字ハ季珪清州東武の人容貞美こと色淡りて仙女を  
氣調ハ世俗ハことと云んて  
外人ハ不識承恩處唯羅衣染御香

嬋娟兩鬢秋蟬翼宛轉  
雙蛾遠山色

怪莫紅巾遮面  
咲春風吹綻牡丹花

李延年之族  
一妍以始飛衛子

宮詞云て妓女が帝寵得る宮中のことを作し我身恩一元積  
電光うけと人こそあぬ綺羅の衣裳に君の御深香うと  
まりある人こそぬ心の  
内にもひ出さるる  
嬋娟兩鬢秋蟬翼宛轉雙蛾遠山色  
美女の兩の鬢の嬋娟ハ秋の蟬の翼かぬと雙る蛾の眉ハ白  
の宛轉ハあをみどりなる遠山の色の下れたけいなり

莫怪紅巾遮面咲春風吹綻牡丹花  
李延年之族一妍以始飛衛子

夫之待時在衆醜而永異  
野相公



之時待衆醜  
不在而永異

秋の夜月を待て  
縵に山を出之清  
光望夏の日蓮  
思て初て水  
穿之紅艶を見

宮人の才色兼  
樓未下未詔來

卷之八

新

三

秋夜待月。縵望出山之清光。夏日思  
蓮初見穿水之紅艶  
宮中の美人粉黛の粧を催し作序之女の化粧して出るは  
秋の月を待て山の端より出たる清光望夏の池辺に蓮を  
思んに水の面にもめてしるる色  
紅艶あつたところちす

筭取宮人才色兼  
樓未下未詔來  
前の序とむら詩四韻皆入む宮女の中才能あつて歌ひ  
舞美色艶容やると兼するを誰とと筭取て召す其  
美化粧して下を果さるは城を」と粧樓  
宜旨の御使さるる來る城添と作るあり

添  
雙環且理て春  
雲軟片黛總成  
曉月織

羅袖火尉鳳釵  
還悔鎖香奩  
とを悔

和風先薰煙出  
珍重紅

雙環且理春雲軟片黛總成曉月織  
上の胸句雙環左右のじんづる春雲髪ゆるりてを雲か同  
諭と多し理ゆるる軟髪ゆるりて帝より頼小召す也  
やうく片の眉小黒とさしゆるるあつ  
曉の月の織ゆるり小も  
羅袖不遑廻火尉鳳釵還悔鎖香奩  
上の腰句綺羅の袖に皺あつたのすさるる召す同  
ゆ火尉を廻す遑もれ鳳凰の形に作る釵挿ん  
は香奩をか鎖ちたるも急に  
取出しつた悔ゆるり

和風先導薰煙出珍重紅房透翠簾

月永國字少

卷之八

雜

四



房翠簾小透

嫌らく錦帳

裏て長麝香薰

珠簾を巻て晩

金を着て

今日の新饑

饑に死んと欲ま

泣先朝舊賜の

筆を賣

上の落句之上に通し四句の律に成りて妓女の来りて紅の夜かよ

翠簾より透てる音家花草の玉簾とわり

嫌裏錦帳長薰麝香卷珠簾晩着釵

此詩昔より題も作者もさへ一説小菅三品とて妓女の来りて待

出来ぬを嫌の玉の簾を巻て晩

老命婦の詩に五位以上の女官中には命婦と云其老

大水滝と云琴のひら年老て零落其琴を賣饑に筆

今この饑と云心かて新と云饑かかく訓死はそれにあつて舊

の哀のうらまて琴筆通し用もも實異に琴は五帝の時

あまの風雲のうらまてと云

み席の舞ををてある天女は宮中舞の女にいらる時

秋未鳴遊女佩寒雲空望夫山

思ふ所の佳人に寄詩に佩は玉貫女の腰にありて帯の賀蘭

雲空望夫山にたるびに満るを待人の来る當意

云て彼女も我を思ふ望夫石のそやわらんと思ふ心博物志

小顔雀大將軍として秦の国に討ち行きて三年まゝ歸りてその

遊女

秋水未遊女の佩

を鳴未寒雲ハ

空望夫山満

遊女

秋水未鳴遊女佩寒雲空望夫山

思ふ所の佳人に寄詩に佩は玉貫女の腰にありて帯の賀蘭

雲空望夫山にたるびに満るを待人の来る當意

云て彼女も我を思ふ望夫石のそやわらんと思ふ心博物志



翠帳紅閨萬事  
之禮法異雖舟  
中浪上二生之歡  
會是同

家江河南北の  
岸に交心上下往  
來の船に通ず

和琴緩調て潭  
月小臨唐櫓高推

て水煙入

望夫石と云と日本松浦の  
望夫石同日の詠なり

翠帳紅閨萬事之禮法雖異舟中浪  
上二生之歡會是同  
以言

遊女の詩序之伊豫守遠古が任国侍らに相見に下と河  
尻にて作るよと翠帳紅閨の内にて嫁る貴女のありさまの思ひ  
多くくさくさいしあわぬぬらぬらも舟中浪上も半分小應ず  
歡會同一と嫁娶の六禮とそ納采問名納吉納徵請期親迎  
かとの礼法儀禮小委  
萬事の禮法とは是

家交江河南北岸心通上下往來船

此詩下に通絶句一章にて遊女の  
さゆ作さる心にあさくさくなり

源順

和琴緩調臨潭月唐櫓高推入水煙

和琴ハ日神天磐戸に籠せまひ一時神樂奏せし時弓  
かへ絃弦鳴るにわたりあつまこと云六絃遊女緩調  
潭の月成ち臨る船小乗櫓推く水上の煙入と作ハ遊  
女と船と船着に多く唐ハ楓橋漢水のほとり和小江口神崎  
河尻と水辺に在る舟に  
乗居とのるまをなかり

新古今  
ちつるまをなするたにむけいよあまのふるまを

新古今ハ題よみ人志はとわり渚ハ海辺之蟹の子の賤さ身  
らま宿を夫と定ぬと誰とかく旅客にわひるるありまを

老人  
禮記曲礼ハ七十を  
老といふ

昔為京洛聲華客今作江湖潦倒翁

白氏唐の元和中江州司馬小九遷して作る昔都て仕し時  
榮花いふこりも今罪戾蒙りて江湖潦倒て翁と聲華

老眠早覺常殘夜病力先衰不待年

月永國字少

卷之二

雜

六



衰て年汝待不

再三汝汝憐他

事に非天寶の遺

民見と漸稀り

紅榮黃落す

樹之春の色秋の

聲結綬

抽一身之壯心老の思

樂天少

三年猶已衰之

勝地遊

一日是老之幸

小非哉

大ハム望之周文小  
遇渭濱之波面小  
疊綺里季之漢  
惠輔高山之  
月眉垂

老の睡覚汝作り老てハ宵に眠曉を待す自覺夜長く白  
残明気も身も衰病老の身ハ明年も待ぬ

再三憐汝非他事天寶遺民見漸稀

康氏の雙に贈詩ハ唐の八主代宗の太曆七年白  
十六主宣宗の大中元年七十六卒す天寶の六主玄宗の年  
号ハ康氏ハ天室の比の人死殘古人皆亡生ハ  
るに君の存命再三憐に

紅榮黃落。一樹之春、色秋、聲。結綬、抽

簪。一身之壯、心老思

一、一條、九大臣雅信ハ九大臣表を菅三品の書  
の、一、の、樹の春、に榮秋、黃落、を、一身の若盛時  
の君に仕老の、官、世、道、心、綬、ハ、  
ハ紫の綬、結、君に仕、抽、簪、ハ、頭、の、を、取、舍、ハ、世、の、  
心、ハ、一、身、盛、る、時、ハ、綬、ハ、心、老、て、ハ、  
簪、ハ、抽、ハ、思、の、を、一、身、ハ、

少於樂天二年猶已衰之齡也遊於

勝地一日是非老之幸哉

山家の部出尚齒會の序貞觀年中大納言菅三品  
二年三月十日大納言藤原在徳卿菅三品序者菅三品  
本朝二度の會ハ白樂天ハ七十二唐の尚齒會菅三品  
六十九此朝の會ハ三年少猶老衰の身勝地  
勝地ハ此會の處を云老七人の老幸と云

大ハム望之遇周文渭濱之波疊面綺

里季之輔漢惠高山之月垂眉

壽考策の文之周の文王渭の濱狩多史編今日の  
狩ハ熊あハ天君の師得ハ武王を輔  
其年老顔の皺を波武王を輔







交友

琴詩酒の友皆  
我抛雪月花  
の時最君憶

陽春の曲調高  
和難淡水の  
交情老始知

いづくふるまふとばよせば世の中は老はれぬとぬらん多  
識も老人いよとせらるるまばら方に我身はせん  
とてはるるまふとばよせば世の中は老はれぬとぬらん多

交友

友と交の深は門は同く  
心は同くすは友と云とあり

琴詩酒の友皆抛我  
雪月花の時最憶君

段協律と云人と昔江南遊  
贈我ハ琴詩酒の二三を北窓の友とせらるる若は時あか

かの三三はあか友も多しに老ぬと其友も  
さるる雪月花の興ある時足下のそれ思ひ出ると

陽春曲調高難和淡水交情老始知

張員外が新詩の巻の後に題元微之の寄詩  
陽春の曲調鄧中の歌の曲之鄧ハ楚の都て歌は好くふあふ  
陽阿雅露と云曲ハ和とるもの數百人陽春白雪の曲は和

そのもの數十人又過ず是其曲いよ高和知と云い  
く少と文選にあり高和知と云是張十六詩乃  
及がれは譽小用ひきり君子の交は淡く水のと云本文  
めて淡水の交情と作り水のいよと云淡く味りるる人  
の交ハ甘く醴のじとて初限かく甘くも後必味りるる始  
とて後次第いよと云れたる年老人々の疎るる君の  
昔にるる孫を淡水の契るると老の後  
とてと元微之のいよと云

昔年顧我長青眼今日逢君已白頭

阮籍と云ハ晋の七賢の内て親人ハ青眼を以て  
許渾  
と云と陳と云ハ白眼を以て之世説晋書かどに出此詩ハ  
甲衛に贈と云ふ昔ハ志と云ハ心ハ青眼の二子にゆるじ  
と云ふ今日我身老く昔の友ハ逢た白髪と云る

蕭會替之過古席託締異代之交張

僕射之重新才推為忘年之友  
後仁想

昔年我顧  
長青眼今日  
君に逢バ已白頭

蕭會替之古席  
過古席託締異代  
之交張締張僕射  
之新才を重推て







主事渺茫都似夢  
舊遊零落半歸泉

蘇州船故龍頭暗  
王尹橋傾雁齒斜

君ももハ先づ去りて我独留りて此後ハ  
廢人ヤぐく至り秋風の吹後一入物悲  
友ハ黄泉の下にわらう

往事渺茫都似夢 舊遊零落半歸泉

白氏の友元稹は沈水の辺に別れ五年ハ  
かたわひ三宿さう明に送らる若く昔の  
小夢のやうな半の黄泉小歸せさうと  
こころそそ半の黄泉小歸せさうと

蘇州船故龍頭暗 王尹橋傾雁齒斜

白氏ハ蘇州の刺史なり時乘船も今故  
る王尹ハ所の名と云はれ橋ガわら雁齒  
雁の齒に似たる城象なり遊仙窟の文  
橋も傾た板も斜なり傾の字よく置と云

金谷花の醉之地  
花春毎句而主不歸

金谷醉花之地 花春毎句而主不歸

南樓翫月之人  
月與秋期而身何去

南樓翫月之人 月與秋期而身何去

王子晉之仙  
後人立祠於候嶺之

王子晉之仙 後人立祠於候嶺之

立羊太傅之世  
早世行客墜於峴山之雲

立羊太傅之世 早世行客墜於峴山之雲

立羊太傅之世  
早世行客墜於峴山之雲

立羊太傅之世 早世行客墜於峴山之雲

明永國字少

流紫安樂寺管公の廟にて文あり序之  
王子晉仙人と云り候氏山の歸來て笙を吹り

源相規











范蠡責勾踐  
小收。扁舟。五湖。  
湖。於。乘。外。犯。  
罪。文。公。謝。

范蠡收責勾踐乘扁舟於五湖咎犯  
謝罪文公亦逡巡於河上  
後漢書文

范蠡收責勾踐乘扁舟於五湖咎犯  
謝罪文公亦逡巡於河上  
後漢書文

て亦河上に於逡巡

其磧礫不窺  
玉淵者未知  
驪龍之蟠  
所蟠。習其弊邑不視上邦者未知

其磧礫不窺玉淵者未知驪龍之所蟠。習其弊邑不視上邦者未知







昇殿は是象外  
之選也俗骨ハ  
蓬萊之雲ハ  
踏可不尚書也  
亦天下之望也  
庸文ハ以臺閣  
之月ハ攀攀可不

齡顏駒過三代  
を過而猶沈恨  
伯鸞同五噫ハ  
歌而將去ト將

昇殿是象外之選也俗骨不可以踏  
蓬萊之雲尚書亦天下之望也庸文  
不可以攀臺閣之月

齡亞顏駒過三代而猶沈恨同伯鸞  
歌五噫而將去

經云志氣養之云云氣はつゝめ心はつゝしむと云此人之の  
ありさるる作者相公の御身より面白く思ふ心の速懐の篇入

直幹ハ民部大輔を望むる申文ハ殿上を仙宮に比してより五位  
以上の叙して殿上ハ許さハ象外の選つて其器にあらん人のと

金骨として仙人の掛あはれこそまゝハ昇殿をばめさるる我  
身俗骨として仙人同いのをむさるゝれば蓬萊の雲を踏

くハ尚書ハ辨官ハ要官ハ天下の競望しをハ庸文人  
の身より思ひかくくハ臺閣ハ尚書の省にハ庸文

親王家宴會の詩序ハ身の沈沈然然と心漢武故事ハ  
漢の武帝帝官の署か一人の白髪はんで何の時節と

ハ答てハ顔ハ駒ハ文帝の時節と何ぞを過るハ答て  
文帝ハ文を好臣ハ武ハ好景帝ハ美ハ好臣ハ負醜ハ今陛下

ハ少ハ好臣ハ老ハ此故に三代ハ遇す武帝感して會秘の  
末とするハ作者の心老の身も終に用らるると故身彼に亞

ありかハ三代を過て猶沈とせんハ後漢書に梁鴻ハ  
伯鸞平陵の人博學にして家貧東關出京ハ過五噫の

歌ハ作らるる噫ハ於其死恨聲と和訓ハ何とあり其歌云  
嗚呼北芒兮噫願覽帝京兮噫宮室崔嵬兮噫人之

劬勞兮噫遠々未央兮噫噫の字ハあるも五噫の歌ハ  
云つたハ其ハ小むたる鼻伯通家ハわさるるハ書十餘篇著

法此二事世に用らるる意ハ作らるる此序ハ人ハ怪  
果して正通妻子ハむらり高麗國に渡重く用らるる宰相

と成る其後彼國の商人來て日本ハ其重く用らるる國ハ  
思ふもの我邦ハ多くと語り一説ハ其具平親王ハ奏て書

くる序ハ爲憲齊名其席ハ在此句ハ聞て正通ハ思ふと  
えさるる正通之りて其曉ハ日本ハ去らるると云

親王家宴會の詩序ハ身の沈沈然然と心漢武故事ハ  
漢の武帝帝官の署か一人の白髪はんで何の時節と

ハ答てハ顔ハ駒ハ文帝の時節と何ぞを過るハ答て  
文帝ハ文を好臣ハ武ハ好景帝ハ美ハ好臣ハ負醜ハ今陛下

ハ少ハ好臣ハ老ハ此故に三代ハ遇す武帝感して會秘の  
末とするハ作者の心老の身も終に用らるると故身彼に亞

ありかハ三代を過て猶沈とせんハ後漢書に梁鴻ハ  
伯鸞平陵の人博學にして家貧東關出京ハ過五噫の



言下暗に骨を消する火を生じ、  
吟の中は儉い人  
刺刀は鋭

思を一車ふ載と  
も何ぞ畏に足ん  
巫の三峽に棹も  
未危と爲末

楚の三閭が醒と  
終つ何の益ある  
周の伯夷が饑と  
も未だ賢も賢も

言下暗生消骨火吟中儉鋭刺人刀

人の心表裏ありて火を以て骨まで消滅するやどの巧なり吟顔ふら  
解まば儉い人刺刀は鋭い  
世に世に有る白氏文集吟中有刀潛殺人と云ふこと

載思一車何足畏棹巫三峽未爲危

人の心怖くこれのむごころを思一車ふ載る周易前中書王  
睽の卦上九の辭めてくわの恐れた文字はく用するの易の義

畏小足す唐の江州巫山に三の峽山あり其所の水急にして  
舟行難しども人の心は比も危にありと云文集大行路小巫峽

水能覆舟若比人心是女流とあり巫峽の詩は積也

楚三閭醒終何益周伯夷饑未必賢

賢人成賢ともる世に其心をわき賢人も用はぬ橋侯草  
世に唯世と云はる身成全せん小徳と云ふは楚の三

ら未

閭の大夫屈原が独醒するを伊羅が放る賢なるひもこと  
云紅葉の詩雁の詩に叙す伯夷は遼西の孤竹の君の子父死

する時位叔齊伯夷の譲りて兄伯夷はゆきて位は避り  
伯夷も父の命背てさうと弟もつり互に去る也中子位成

つらう伯叔兄弟周の西伯侯文王の徳を慕ふて往て周を  
りては文王の御子武王殷の紂王位を成諫父の喪小車を

起す孝にあり下して上は忠あり人を殺したのひに  
小あはれといさめ用とす首陽山にかくて飢死る夫も何の益

ありと云て世に憤る心あり伯夷叔齊  
と、廣州先賢傳其外諸書に出

何ぞ一己のいふづの老いん卒の思んもあつて

古今俳諧歌にこそやうれとありやうれに恥ぢ  
何のやうにもなくお過ぐれがうれに恥ぢる

新古今  
世の中はともかくともあつていふもあつていふもあつていふも

あつていふもあつていふもあつていふもあつていふも  
果ありて住終るにあつていふもあつていふもあつていふも



そとだに... 拾遺集... 法師... 思ひ... 月... 濁る世... 法師に

慶賀

我人のよろこび哉

劍佩曉超雙鳳闕。煙波夜宿一漁船。

慶賀 劍佩曉超雙鳳闕 煙波夜宿一漁船

白氏九江郡... 時江浦... 宿元... 宮城... 鳳凰... 東宮... 雙... 闕... 煙波... 漁... 船... 錢塘去國三千里。一道風光任意看。

錢塘國を去り 三千里一道の風光 任意看

及第... 詩... 塘... 昔... 夜... 大... 水... 來... 一... 郡... 大... 湖... の... 章... 考... 標... 一時... の... 人... 錢... 塘... 以... 以... 以... 沙... 石... 買... る... の... 天... 下... 一... 時... 以... 塘... 來... る... の... 賣... 得... ば... 又... 投... 捨... て... 歸... る... 是... 以... 以... 一... 時... 以... 塘... 來... る... の... 水... の... 愁... る... 一... 道... の... 風... 景... 心... 任... 意... 看... 及... 第... と... 其... 學... 文... 試... ら... ば... 朝... 廷... へ... 仕... 進... 士... 試... の... 科... に... 至... 及... ぶ... 義... あり

想得江南諸父老。因君鞭撻子孫多。

想得江南諸父老 因君鞭撻子孫多

吏部侍郎職侍中。着緋初出紫微宮。

吏部侍郎職侍中 着緋初出紫微宮

栗田大臣在... 式部... 正通



銀魚腰底春

浪波辭綾

鶴衣間舞

花月一窓の交

昔眠雲泥萬里

の眼今窮

躬を省て還  
耻相知との久

或云是式部丞藏人にて叙爵の時の詩也。或云是式部丞中とある  
がとより侍中、藏人職はつとささる。緋袷を着て五位の夜  
紫微宮、天子の居る所の北辰帝坐小まじひ。藤原の衆皇  
のころ天竺紫微垣と下りて五、五位藏人小補して緋の袍を  
着て、紫内ものむした。替はつと又一説に式部少輔  
侍中兼補の也。吏部侍中といふなり。

銀魚腰底辭春浪綾鶴衣間舞曉風

上の詩の胸の句へ殿上人の幕會の時魚の袷は腰につく。同  
魚の形は銀にて作帶のがさうにつく。金魚は袷に金にて作る。此魚

は浪波をさかす。腰の底にあると綾の文に雲鶴は織る。風に  
吹さうごく。曉風は舞と作。緋は去るなり。

花月一窓交昔眠雲泥萬里眼今窮

上の詩の腰の句へ昔月花は一窓小弄ひ。眠交はつと今君  
貴く我は賤く天地雲泥と隔り眼も及ぬ。心は窮とす。

省躬還耻相知久君是當初竹馬童

君は是當初竹馬  
の童なり

落句へ上と通じて律一章へ君をも知身も知らもつと。同  
久に思ひ恥じ君は幼なり。竹馬の童なり。今かく榮我は

長幼のしるも沈をそめと竹馬の  
故事前巻にこそく出たり

新勅撰  
つとささるは袖はつとささるひいふもあまらぬ。お  
古今ふもささるは袖はつとささるひいふもあまらぬ。お

とささるは袖はつとささるひいふもあまらぬ。お

いつとあまらぬ身もあまらぬ。お

祝慶賀と祝との、ささる祝はつとささるひいふもあまらぬ。お

嘉辰令月歡無極萬歲千秋樂未央

祝  
嘉辰令月歡極  
無萬歲千秋樂  
未央

是の神雜言の詩へ英明の作と云。工師云踏歌の詩へ。謝儀

聖武天皇天平元年と。中宮を置踏歌を行ふと云。元  
元三上巳端午ふと。嘉辰令月と云。未央と盛なり。この  
帝王大臣家々御慶賀の時あまらぬ。お



長生殿の裏の  
春秋を富不老  
門の前ハ日月  
遅

先此句は... 起立せりちのく... 緋四丈... 賦に吟はまじて

長生殿裏春秋富不老門前日月遅

天子萬年と云... 春秋富日月遅... 程大昌... 殿に齋... 行道も... 君が... 古今集賀の歌に我君... 増... 崇... 此故事... 御代... といふ... 此点と雨の縁語なり

長生殿裏春秋富不老門前日月遅

古今集賀の歌に我君... 増... 崇... 此故事... 御代... といふ... 此点と雨の縁語なり

戀

君が爲に衣裳の  
薫すも君蘭  
麝香聞かざら  
香も不とおも  
君が爲に容飾  
事とせれども君  
翠は見えな顔

戀

爲君薫衣裳君聞蘭麝不馨香爲君  
事容飾君見金翠無顔色



色無とちりり

更闌夜靜。長門闌不開。月冷風秋。團扇杳而共絶。

行宮見月。傷心色。夜雨。猿。斷腸聲。

夜雨。猿。斷腸聲。春風桃李花。開日。秋露梧桐葉。落時。

夕殿螢飛。思悄然。秋燈挑盡。未能眠。

南翔北嚮。寒温。因秋。雁。

明詠國書抄

すももも馨るべし思ひ空の饒事... 更闌夜靜。長門闌不開。月冷風秋。團扇杳而共絶。張文成

行宮見月。傷心色。夜雨。猿。斷腸聲。班婕妤。漢孝武帝陳皇后之嬪。長門宮を閑とあはば長門宮の

春風桃李花。開日。秋露梧桐葉。落時。長恨歌の句へ唐の玄宗皇帝蜀の中路へ揚貴妃

夕殿螢飛。思悄然。秋燈挑盡。未能眠。南翔北嚮。難付寒温於秋。雁東出西流。六寄瞻望於曉月。後江相公







まつ心もまはさうたると餘情うごりさく  
感慨ふうに歌なるべしとぞ

いままんとしいたりのふせ月のまの月のまの月まらちていふかま

宗祇玄旨の説有明の月はまち出る心一夜の義ふわびたの光  
く月日成送行小秋さく長月九宵の空はらりもくこもたき思  
入くわらひふさ歌なり餘情とくく歌とぞ  
有明の月の在る夜明る十五成過下弦の月

無常

觀身岸額離根草論命江邊不繫船

身の危し岸額の根草のどく命の定るは江の羅瀨羅瀨 羅維

年年歲歲花相似歲歲年年人不同

花の色は年年々變り人も人々歳々老去て易り心くを云 未忠問  
此詩唐詩選にも出唐詩遺響小集希夷作たり希夷

殺して子問我作と称  
まると云説あり信

蝸牛角上争何事石火光中寄此身

蝸牛はうづつむらへ角牛に似るも(右)つく莊子ふかの角の白

ふ各々の国ありたか觸氏右に蠻氏二国時々地を争て相戦ふ  
とある莊子が寓言のいづりりかの角はれのむらひるはるる

果してかの角のあるらひるはるら夫は何ぞ人々の心を争ふ  
そと身のもらるは石火の光の消安たのれとへ金城石が打

火の出るこも城  
石火といふ

生者必滅釋尊未免梅檀之煙樂盡

哀來天人猶逢五衰之日

重明親王の北の方四十九日後江相公の書とる願文に經い  
夫生輒死とある生者必滅といふなり釈尊は鶴林の菘

蝸牛の角の上の  
何事を争石火  
の光の中此身  
強寄

生ある者ハ必滅す  
釋尊と未梅檀  
之煙ハ免(未)樂  
盡て哀來天人も  
猶五衰之日に逢







闇夜に明月の地  
を行猶人間却白  
雲の天を踏

秦皇驚歎燕  
丹之去白の鳥  
の頭漢帝傷嗟  
す蕪武之來時  
の鶴の髮

闇夜猶行明月地 人間却踏白雲天

此句の本をあり雪の景は作し闇の夜も明月の地は行いたるありてくまを白雲の天のくまを歩行かん人間が天を踏く行かてあると

秦皇驚歎燕丹之去日鳥頭漢帝傷

嗟蕪武之來時鶴髮

白髮賦は燕の太子名丹秦の国に人質として在りて元より孝心の人なりとある時太子丹の国に飯て親仕は心煩る事此事故は天子を遣はし秦皇は情る人かてあざ笑て鳥の頭白くたり馬に角の生ん時汝は免し歸んとる事天子天に仰ぎ歎て云天我心は察せよ地に俯して歎て云地我心は推せよとやと白に頭の鳥飛來り秦皇の殿上にまはり又額に角の生る馬宮中に走へり秦の始皇大に驚歎し丹はもして飯り史記小出燕丹に至孝天地の感應を知らる

銀河澄朗たり素  
秋の天又見林園  
白露の圓やう成

毛寶が龜の寒  
浪の底に歸王弘  
使立晩花の前  
立

銀河澄朗素秋天又見林園白露圓

毛寶龜歸寒浪底王弘使立晩花前

上の詩の胸句へ蒙求に毛寶白龜とありある人江の辺に白龜の甲長五六尺あるなり毛寶字碩眞晋の世の人なり其の龜は買取て江に放し其後石虎の仇二方騎と戦ひ毛寶は負て江入り石を踏心地にヤリ岸に至り恨みて鎮まの白龜をあり晋書に出寒浪と作し浪も白に陶潛字淵明酒を嗜り九月九日に酒





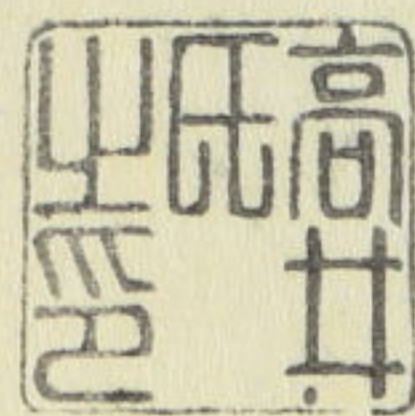


朗詠註本世有りてその頗多し然中永隆季抄最  
 畫より借らく先人の詩天室遺民の詠并年歴  
 決下た全部れ中若く有之且詠歌作者名字位階  
 等の下たも半を脱り我家大人崇山先生抄裏と  
 乾更小一部抄抄及作者れ名位ハ巻首に列して欠  
 既補之全ハ巻先生自筆一上中自云故人能  
 糟粕抄四齊と少子聊訂能の新なる成識と巻末述云

享和三癸亥

孟秋日

男 高伴恭



書肆

京都三條通升屋町

出雲寺文次郎

同 寺町通松原下ル

勝村 治右衛門

大坂心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

同 安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 本町通横山町壹丁目

出雲寺萬次郎

同 芝神明前

岡田屋嘉七



